

## オキシトシンと地域医療

滋賀医科大学医学部1年生の亀井裕之です。

取材を通して、たくさんの刺激をいただき、貴重な体験となりました。とても感謝しています。そこで感じたことをまとめました。



今回の取材に入る前は、地域医療や在宅医療について、それほど関心はありませんでした。しかし、実際取材に入ってみて地域医療についての印象が変わりました。

一つ目は「ベースとしての家庭医療学」です。「患者さんの外来診療」が系統だった学問として学べる家庭医療学にはとても魅力を感じました。臨床医を目指すのだったら、専門医志望でも家庭医療学は学ぶべきだと思います。家庭医療学に精通した専門医が増えるのが、非常に大切なような気がします。

二つ目は、医療の醍醐味です。取材で出会った患者想いの先生方に接して、かつての主治医との関係性思い出しました。私は潰瘍性大腸炎のため通院していたのですが、この病気が再発のため入院を繰り返すことが多く、主治医との関係は長くなります。取材で思ったのは、患者さんと長期に関わる点で、慢性疾患と地域医療は、本質的に似たところがあるように思いました。体だけでなく心も治す、それが本当の名医だと思うのですが、病気の症状だけでなく、生きるとは何か等、人生の深遠なる部分に触れることができるのが医療の醍醐味であり、地域医療や在宅医療もそういうものではないかと感じました。

もう一つ今回の取材で学んだのは多職種連携等、チームワークの大切さです。心ある医師と患者が手を取り合って、そんな仲間が手をつないでいけば何か変わる気がしました。インターネットで全世界がつながる時代です。滋賀を超え、日本を超え、世界中で待っている同志と手と手を取り合ってチームワークで世界を変えてみたいです。

最近、ホルモンに関する本を読んだのですが、その本によると、目標を達成したり、夢を実現したりするときに出るホルモンがドーパミンで、快楽的な感覚を覚えるホルモンだとあります。ドーパミンと逆のホルモンがオキシトシンで、ドーパミンと違って、ふれあい等ほんのりした愛情を感じている時の幸せ感が、オキシトシンの効果とのことです。今の世の中で、ドーパミン中毒症ではないかなと思います。ドーパミンの快楽的な刺激を求めて、もっともっと「成功という欲望」に振り回されているのが現代社会では？と思ったりします。だとすれば、今回、取材を通して、在宅医療&地域医療ってまさにオキシトシンのなせを追求していく医療ではないかなと感じました。そして、このドーパミン優位な社会において求められるのがオキシトシンのなせ幸福だとすれば、地域医療は本当に大切ななせだと思います。人が人を支えるって素晴らしいですね！

### あとがき・謝辞

パンフレットの作成は、順風満帆なものではありませんでした。ときに議論が深夜におよぶこともあり、そうした過程を経て、初稿から無数の校正、訂正を繰り返しました。しかし、それはパンフレットを完成させる上で不可欠な過程であったように思います。

私たちが今回、こうしたパンフレットを作成したのは、「はじめに」でも言及したように、滋賀県からの依頼によってでした。しかしながら、本誌作成にあたってもっと多くの収穫を得たのは、他にもない、编者たる私たちであったように思います。私たち学生は、在宅医療の第一線で活躍する方からお話を伺うことはほとんどありません。まして、今回のように密な会話の場面で、これだけ多くの医療職の方からお話を伺うことができる機会も極めて貴重です。地域の医療現場から発せられるたくさんの生きた言葉は、私たち各人の中で咀嚼され、持続低音として今も心の中で静かに響き続いています。今回授かった経験と言葉は、私たちが将来医療者として現場に立つ際にも、かならずや響いてくと予感しています。こうした特別な機会に恵まれた私たちは幸せ者です。

最後になりますが、今回お世話になった方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。まず、滋賀県健康医療福祉部医療福祉推進課の皆様にも、こうした機会を与えてくださらなかったら、先述したような経験を得ることはできませんでした。そして、インタビューをお受けいただいた雨森正記先生(弓削メディカルクリニック)、糸山めぐみさん(訪問看護ステーションオリーブ)、今村浩先生(坂本民主診療所)、大石和美さん(丸山薬局)、小川薫子さん(草津市中央地域包括支援センター)、小串輝男先生(小串医院)、加藤順子先生(加藤歯科医院)、北野充先生(北野医院)、楠神渉さん(NPO法人加楽)、古倉みのり先生(甲南病院)、埴田まゆみ先生(坂本民主診療所)、西山順博先生(西山医院)、橋本修先生(橋本医院)、畑野秀樹先生(地域包括ケアセンターいぶぎ)、花戸貴司先生(東近江市永源寺診療所)、東昌子先生(膳所診療所)、福田章典先生(ふくた診療所)、本多朋仁先生(本多医院)、松井善典先生(浅井東診療所)、松尾隆志先生(まつおファミリークリニック)、松木明先生(松木診療所)、本岡芳子さん(滋賀医科大学医学部附属病院患者支援センター)に。先生方には、私たちの率直な、ともすれば失礼になるような物言いでさえ、快く答えていただきました。先述したことに加え、本誌に掲載させていただいたデータのほとんどは、先生方の言葉です。先生方なくして、パンフレットの完成はありえませんでした。

また、認定NPO法人 滋賀医療人育成協力機構の事務局の皆様にも、取材からパンフレットの作成に至るまで、裏方として常に暖かいご助力をいただき、わがままや不手際が多い私たち学生にとって、とても大きな支えとなっていました。本当にありがとうございました。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。本誌が、滋賀県の医療をより良くする一助となれば、こんなに嬉しいことはありません。

国際保健・地域医療研究会 TukTuk 一同